

金沢研修旅行 -1

この5・6日、金沢へ建築学会埼玉支所研修旅行に行ってきた。当会役員でもある白江隆三君の作品、「金沢駅おもてなしドーム・鼓門」を彼のガイドで見学しようという贅沢な企画である。



熊谷を早朝6時32分の電車でひとまず大宮へ行き、大宮駅に参加者8名集合、7時46分発のかがやき503号で金沢に向かった。悲しくも熊谷駅は速度を落とす事も無く通過し、停車駅は長野・富山の2駅で、金沢9時54分着と、只々凄まじいばかりに金沢が近くなった。



暗黒を抜け度に冬天落ちにけり

幻極



北陸新幹線のスピード感は、トンネルを抜ける度に冬の空が落ちて来ると言う思いがした程である。車窓を眺めるままに金沢に到着した。



2005年に完成した金沢駅東広場は、北陸新幹線開通を機に大きな注目を集めている。ガラスとアルミフェニウムで出来た巨大な大屋根の「おもてなしドーム」と木造のシティーゲート「鼓門」は、金沢のランドマークとしてと高い評価を得て今日、世界の美しい駅ベスト10にも選ばれている。白江氏自身、設計、工事設計管理と12年と言う長期に渡り、金沢に通ったと言う。

完成当初、その偉業に反して建築の異形に批判も有ったと言うが、程良い市民との熟成の期間を得て、今が在る。

計画は、徹底したバリアフリー、環境に配慮した施設整備、そして地域の交流と賑わい創出、という3大テーマを挙げ、それぞれに明快な対応が為されている。乗降者シェルターの屋根には建材一体型のアモルファス太陽電池を敷設し、年間84.400キロワットの発電量を得ている。また、大屋根の雨水を貯留し濾過した後トイレの洗浄水、植栽の散水に再利用し、年間使用水量7.000トンの66%を賄うと聞く。



組柱1つに内外12本を逆方向に傾けて配置した24本の柱で構成された「鼓門」は、大屋根からの落雪受けと雨水集水庇、地下空間の吸気塔を一体化した木造の門であり、異彩を放つ。20世紀の合理主義と技術美を徹底したデザインコンセプトに、金沢の伝統と文化を融合した金沢駅東口広場計画は、白江君の代表作に違いない。正しく評価をしながらも、今回の参加者8名中5人が同じ大学の出身で、彼が一番の後輩である。金沢駅からおもてなしドームに入ると左手に交番ブースが目に入る。あんな物は壊してしまえ、鼓門の柱の頭押えのデザインがシンプルに収まっていない、と言いたい放題。それを聞いていた大学教授は、「先輩は遠慮が無いですねえ・・・」と笑う。私は、鼓門をバックに記念写真を撮る学生グループに、「この方がこの門を設計した建築家。一緒に記念写真を・・・」と声を掛けたりと、何とも楽しく充実した時間と成ったのである。

続いて兼六園に移動し、冷たい雨の中、御庭の見学をする。既に雪吊りの施工も終わり、北陸の冬本番を待つばかりであった。



続に向かったのは東廓、東茶屋街の「懷華楼」の茶屋見学。お抹茶と和菓子を頂き一息を吐く。

実はスケジュールには無いサプライズ・プログラムを用意していたのである。

20余年前地元銀行の若手研修会で金沢訪問、宴席で知り意気投合して、その後何度か金沢訪問の機会を得て、折々に厚誼を頂いて来た踊りの名手、ふみ姐さんに連絡を取っていた。10年程前から、自宅をリフォームし、ひがし芸妓に受け継がれたお座敷踊りの粋、芸妓の情緒、美しいお座敷文化の伝統を多くの観光客に披露する為に開いている「雀のお座敷」に案内したのである。久し振りに御会いする文さんは、御変わり無く、4年前母上の御逝去を機に芸者を上がり、「雀」を舞台に、加賀の粋を発信し続けている。加賀弁の語り口は心地良く、芸に対する強い思いは、論として全て腑に落ちて行く。小唄「加賀鳶」の小唄振りを久し振り拝見した。



「加賀鳶」は、加賀藩お抱えの「大名火消し」の事で、力強い男踊りは、ひがしのお座敷に伝わる名物の舞である。金沢一番の踊り手で、初めて拝見した時その舞に強く心魅かれ、御座敷を見続けた。30人程の宴会客の中で熱心に見ていた私を、踊り手も気付いてくれた様で、舞を終えた後注しつ注されされつ姐さんと随分と話し込んだ。そんな事が知り合うきっかけに成ったのである。

この価値ある伝統文化をどう継承して行くのかと言う問いに、残念ながら踊りはその場で見、感じない限り価値は無い、と言う。どんなに上手に映像を残しても何の意味も無く、「私が終わる時に、私の加賀鳶も終わります。それで宜し。」と笑う。その潔さに一同納得、極めて豊穡な時間を頂いて、「雀のお座敷」を後にした。

その後、鏡鏡花記念館の見学、そして料亭「浜長」で加賀料理を頂き、研修旅行の初日を終えた。

加賀鳶のほどの辛口爛の酒 幻極

金沢研修旅行 -2

研修旅行2日目は、金沢市郊外にある「Share金沢」の訪問からスタートをした。



「Share金沢は人がつながり、支え合い、共に暮らす街。かつての良き地域コミュニティーを再生させる街。あなたの知恵や知識、昔とった杵柄が生かされます。高齢者、障害のある人、分け隔てなく誰でもが、共に手を携え、家族や仲間、社会に貢献できる街。あなたもShare金沢づくりに参加しませんか。」と書かれたパンフレットを頂いた。サービス付き高齢者住宅、学生向け住宅、アトリエ付き学生住宅、児童入所施設、温泉施設、レストラン、売店、全天候型グラウンド、等々シェアをキーワードにしたコミュニティー施設がある様である。訪問した日が日曜日だったからだろうが、施設内を自由に見学出来たが、運営側からの説明は無かった。パンフレットには2014年のグッドデザイン賞を受賞していると記載されていたが、施設を見てもそれ以上ではない。理念、運営システム等、社会福祉法人・佛子園の担当者からのプレゼンテーションの無かったのが、残念である。それを承知で出向いたのだから、その責任は全て私達にあるのだが・・・。

「Share金沢」で昼食を取った後、「金沢21世紀美術館」に向かう。



設計者の妹島和世と西沢立衛のSANAAは、この建物等によりヴェネツィア・ビエンナーレ第9回国際建築展の最高賞である金獅子賞を受賞している。「まるびい」の愛称を持つと言う丸い美術館は、極めて開放的で、モダンアートを展示するミュージアムにふさわしい。現在、企画展を遣っていたし、勿論拝見したが今回は、金

沢在住の友人からの情報で隣接する茶室を見学した。彼の御実家に在った御茶室が21世紀美術館の敷地内に移築されたと聞く。ここに、茶道の盛んな加賀百万石の伝統を見るのだが、同時に、「金沢21世紀美術館」、そして白江君の建築を受け入れる金沢の革新性に、真の伝統の意味と構造を知らされた。

続いて、歩いて程無い所に在る「鈴木大拙館」に向かった。



「鈴木大拙館」は、谷口吉生 谷口建築設計研究所の作品で、2011年7月に竣工している。玄関棟、展示棟、思索空間棟を回廊で結び、玄関、水鏡、路地の庭で構成されている。設計方針に寄ると、3つの棟と3つの庭を回遊する事で、鈴木大拙を知り、学び、思索する事を意図していると言う。静かで美しい建築ながら、谷口の建築コードのままに予定調和が為されていると思った。例えばあの作家が、外のこの作家が「鈴木大拙館」を計画したらどう成っただろう、と思わせる所が、私にとっては面白かった。

その後、緑の小路を散策をして「いしかわ赤レンガミュージアム」の石川県立歴史博物館、加賀本多博物館を駆け足で見学。そして、タクシーで近江町市場に向かった。今回の旅の最後を、市場の中に在るままの寿司屋で打ち上げをした。

程々の寿司を摘まみながら、金沢の懐の深さを実感したのである。暮れなずむ近江町市場から金沢駅まで歩き、鼓門で最後の集合写真を撮り、金沢発18時51分 かがやき514号で帰路に就いた。古都金沢を十二分に堪能する研修旅行で在った事に、幹事役を御勤め頂いた白江隆三君に感謝し、事故無く無事に終了出来た参加者諸氏に御礼を申し上げたい。



ありがとうございました。